

開催地名：埼玉県吉見町	
開催日時	令和元年 11 月 27 日（水） 18：00 ～ 19：30
開催場所	吉見町民会館（フレサよしみ）
語り部	島田 福男 （宮城県仙台市）
参加者	一般住民、区長（自主防災組織代表）、民生委員、消防団、町職員など 約 200 名
開催経緯	<p>吉見町は災害が少ない地域であるが、近年の状況からいつ甚大な災害が発生するかわからない状況である。しかし、災害経験がないことから住民の危機意識は低く、町内各行政区に自主防災組織が組織されたが、組織されただけで機能していない。また、近年では近所のつながりが希薄になり共助が機能するか不安な状況であり、各避難所の非常電源の確保、防災備蓄品の確保などにも課題が残る。</p>
内容	<p>（1） 連合町内会の防災活動</p> <p>地震というのは、なかなか予知できない。いつ、どこで、どの程度の規模のものが起きるのか、誰にも分からない。したがって、災害に対する備え、準備が必要である。地震が起きてからではなかなか対応することが難しい。前もってみんなでお話し合い、それぞれの地域のルールというものを決めておかないと、対応が難しい。</p> <p>そのような観点から、私たちの地区では平成 14 年に連合町内会に自主防災組織を作った。川平学区連合町内会は 5 つの町内会で組織されている。地域の人口は約 1 万人で、規模の大きい連合町内会である。平成 19 年、川平学区連合町内会自主防災行動計画を策定、防災の取組を始めた。毎月 1 日を町内会防災の日と定め、150 本ののぼり旗を掲げてもらう。ビブスを 150 着購入し、防災訓練などのとき役員に着てもらっている。</p> <p>そのほか、450 万円をかけて発電機やリヤカー、炊き出し用大鍋など防災用資材・機材を購入した。公園の倉庫など各所に置き、すぐ利用できるようにした。平成 22 年には、社会福祉協議会や防犯協会、小学校、中学校、老人クラブ、地域内の病院、商店など 50 団体とともに、川平地区防災対策連絡協議会を設立した。定例会を行うと同時に、避難所運営などを具体的に考える防災訓練を行った。そのあと、災害対応計画案が固まったので地域住民に説明すると、200 件以上の意見が出た。意見を集約していたとき、東日本大震災が発生した。</p> <p>（2） 地震発生後の動き</p> <p>揺れがおさまってから、私は災害対応計画に則り、隣近所の安否確認を行った。また、川平地区の小学校に災害対策本部を設置した。町内会に照明用の発電機、投光器、燃料用のガソリンを設置してもらった。発災初期の段階で重要なポ</p>

イントが2つあった。1つは照明用の器具を町内会に借り、避難所の体育館内を明るくしたことである。おかげでひどい余震に揺れる体育館の中でパニックにならずに済んだ。もう1つは避難者カードを発行したことである。避難所の運営はカードを基に行った。カードは避難者の問合せの際に活用した。また、外出するときは所定の場所に置き、帰ると戻す。食事のときもカードを基に名前を呼ぶ。カードを発行したことで、整然と避難所運営を行うことができた。

3月16日には、仙台市内では1、2を争うぐらい早く、指定避難所を閉鎖することができた。震災前に1年間かけて、50団体で話合いや訓練を継続していたので、意識が共有できており、協力体制を取ることができたのだと思う。

(3) 震災での気づき

ライフラインがストップすると、どういうことになるか。電気が止まれば信号が止まる。照明がなくなって真っ暗になる。また、意外に盲点だったのが電話で、家庭用の電話はほとんど使えないということだった。コンセントに差しこんであるものは使用できず、黒電話のように電話回線に差しこんであるものは使えた。今は改良されて、停電になっても何時間かは使えるものが出てきているようだが、当時は全く利用できなかった。自転車は連絡用に利用価値が高いが、人が漕いで行く必要がある。一番役に立ったのは携帯電話である。通話はなかなかかかりづらいのだが、ショートメール機能は大いに役に立った。

また、トイレ用の水の確保にも苦労した。飲料水は意外と何とかなるが、大量に必要となる生活用水の確保は大変であった。具体的には、近隣の小中学校のプールの水を利用した。



開催地より

受講者は、被災体験に基づく貴重な講演内容に、大変興味深く真摯に受講し、防災意識の啓発に役立ったと感じた。災害の悲惨さや被災者の苦労及び自助、共助の重要性や行政との緊密な連携の必要性などについて理解することができた。平素からの災害に対する備えやルール作り、良好なコミュニティ環境の重要性について認識を新たにした。